74. 瀰漫性肝疾患における肝シンチグラムの診断的意義（組織所見との対比）

九州大学　放射線科
鴨井　逸馬　渡辺　克司　川平建次郎
大野　正人　松浦　啓一

〔目的〕 瀰漫性肝疾患，特に，慢性肝疾患の肝シンチグラフィーの診断的意義について検討した．組織学的に確かめられた症例について，シンチグラム所見と組織学的所見を対比させ，肝シンチグラフィーの診断能について検討を加えた．

〔調査対象及び調査方法〕 昭和42年3月より昭和47年12月までの6年間に，当教室で肝シンチグラフィーを行なった約1500例より，瀰漫性肝疾患であって組織学診断の得られた131例を調査の対象とした．その内訳は，慢性肝炎73例（活動型45例，非活動型28例）肝硬変症37例，その他12例，および臨床的に肝障害を認めるが，組織学的に異常を認めなかったもの9例である．肝シンチグラフィーは ^{198}Au コロイド 200～300 μCi を注射し，15分～30分後より検査を開始した．用いた検出器は島津製のシンチスキャナー（SSS-150 S. NaI 結晶の大きさ 5′φ×2′）である．36孔，焦点 7.5 cm のハニカムコーンを用い写真記録のものを判定に用いた．組織学的所見は，肝細胞変性壊死，星細胞腫大増加，細胞浸潤，および線維化について，それらの所見を程度により点数化して表示し，それをシンチグラムの所見と対比させた．なお，肝シンチグラフィーを組織診断との期間は，多くは1カ月以内であった．

〔結果〕 (1) 肝硬変症の組織学的異常度と肝シンチグラムの異常所見とはきわめて高い一致率を示した．

(2) 慢性肝炎活動型と非活動型では，両者のシンチグラム所見にかなりの違いが認められた．

(3) 慢性肝炎活動型では，肝シンチグラムは異常所見を示す割合が高く，一方，非活動型のシンチグラム所見は正常像と判定する割合が多かった．

75. 瀰漫性肝疾患におけるコロイドの肝外分布

金沢大学　核医学科
油野　民雄　松平　正道　鈴木　豊
久田　欣一

〔目的〕 肝硬変症の特異的肝スキャンパターンとして肝右側萎縮左側相対的腫大脾中等度出現の他に右側腫大像が提唱されたが．かかる典型的パターンを示すものは50%にすぎない．そこで今回，肝スキャンに併用してコロイドの肝外分布を測定することにより RI による肝硬変の診断向上を第一の目的とし，第二にコロイドの肝外分布と門脈圧亢進症との関連性について検討を加えた．

〔方法〕 ^{198}Au-コロイド 100 μCi 静注肝スキャンを施行し，同時に静注30分後のコロイドの体内分布を等感度全身線スキャンにより求めコロイドの肝脾外分布率を算出した．また ^{99m}Tc-サルファコロイドによるシンチグラフィを施行し，肝外分布について ^{198}Au-コロイドとの比較を試み，同時に門脈圧亢進症との関連について検討した．

〔結果〕 瀰漫性肝疾患40例についてコロイドの体内分布を求めた所，肝硬変症に特異的に肝脾外 RI 分布率の上昇を呈した．肝脾外 RI 分布率はスキャンで特異的パターンを呈さない肝硬変症や脾腫を呈する疾患の鑑別（特に肝硬変と他の脾腫を呈する疾患の鑑別），臨床上門脈圧亢進症状が著明にもかかわらず脾影の不明瞭な例でのコロイドの肝外分布把握に有用であった．また肝硬変症で，門脈圧亢進症状を呈する群は呈さない群に比して著明な肝外分布の増加をみた．肝スキャン所見との関連でも，肝の不均一な RI 分布，骨髄描画，脾影長との関連で正の相関を呈したが，肝脾外分布率の著明に上昇した例では逆に脾影長の縮少所見をえた．^{99m}Tc-サルファコロイドによる所見では，^{198}Au-コロイドの肝外分布増加例で，脾，骨髄への RI 集積増加所見の他に特異的な肺の明瞭な描画所見をみた．

〔結論〕 コロイドの肝外分布測定は RI による肝硬変の診断向上と共に肝硬変症での門脈血流状態の間接的把握法として有用であり，サルファコロイド肝スキャンでの明瞭な肺描画所見は門脈圧亢進症例に特異的だった．

Presented by Medical*Online